

専門家のための

「本を書こう！」入門

専門書編集者・遠見書房代表

山内俊介著

はじめに 1

第1部 本をまとめる！——発想から企画化まで

第1章 書き溜めたものがある（例えば、論文など）ので、それをまとめたい。書き溜めたものは、十分一冊になる分量がある方の場合……5

1 だれに読んでもらうのかを考えましょう 5 / 2 プランを練る 7 [①論文を並べてみる、②「A論文」を見つける、③部を分ける、④実際に並べる] / 3 そのまま行くか、書き直すか 10 / 4 校閲をする前に 12 / 5 校閲する、書き直すポイント 14 [①文献/②重複する部分/③字句の統一をしたい/④語尾がですます体と、である体で分かれている/⑤見出しの統一] / 6 読んでみる 24 / 7 タイトルをつける 28 / 8 博士論文と自費出版 28

第2章 書き溜めたものがあり、それをまとめたいと思うものの、一冊になる分量には心もとない方の場合……31

1 タイトルをつける 32 [①フォーカス・タイプ、②ミックス・タイプ、③次元変更タイプ、④異次元タイプ] / 2 イントロダクションを書く 34 / 3 目次（予定）を作る 36 / 4 目次ができない場合 36 / 5 目次の並び・各章の量 37

第3章 書いたものはないが、レジュメや講演や授業などをしてテープなどに音源がある場合……39

1 一時間話すと何文字になるか 40 / 2 テープ起こしをする 41 / 3 テープ起こしは勉強になる 43 / 4 話し言葉・書き言葉 44 / 5 レジュメだけがある場合 45 / 6 テープ起こしの後 45

第4章 ほとんど原稿がない。ゼロからのスタートであるひとの場合……47

1 翻訳をやりたい 47 / 2 一人こつこつ訳すときの注意 48 [①本の選び方、②翻訳権をとってもらう、③セルフ・マネジメント、④翻訳ソフトを使う] / 3 アカ翻 51 [①複数で訳すときの注意、②監訳者や監修について、③下

訳は仕事が楽になるか] / 4 一人で書き下ろす場合について 55 [①まずはテーマを定める、②読者対象を考える、③タイトルを決める、④本を具体的にイメージ] / 5 本の内容を決めるための方法 58 [発想法①イントロダクション法、発想法②遠藤式KJ法、発想法③質的研究を真似る、発想法④地図を作る、発想法⑤チャート法、発想法⑥……] / 6 一章の長さ 63

第5章 教科書（的なもの）を作りたい……64

1 教科書は大学教員のお小遣いになりうるか 64 / 2 教科書のレベルについて考える 66 / 3 教科書、もっといいものが作れるのじゃないかと思う 67 / 4 マニュアル作り 68

第6章 何人かで書きたい。いわゆる「編集もの」である……71

1 スピードが速い 71 / 2 質・量が向上する 72 / 3 仲間づくり 72 / 4 学会・研究会などを立ち上げるとき 74 / 5 まんじゅう本として 75 / 6 編集ものの教科書について 75 / 7 編集ものの企画法と出版法 76 / 8 内容のコントロール 77

第2部 文章のテクニク

第7章 文章が下手とは何か……81

1 うまくなる秘訣 81 / 2 でも下手な人のために 82

第8章 本を書き終えるために……85

1 動機づけ 85 / 2 セルフ・マネジメントをする 86 [①執筆計画を立てる、②毎日書く、③モチベーションを保つ、④読んでくれる力を支えにする、⑤書く仲間を作る、⑥学会などを目標にする、⑦合宿をする？ 缶詰になる？] / 3 執筆が止ってしまったら 89 / 4 行き詰まりを感じたら 91 [①散歩に出る・息抜きをする、②手書きにする・テープにとる] / 5 執筆を止めない技術 93 [①あまり読み直さない、②書くことと調べることを分ける、③細かいところまで計画を立てない] / 6 書きあがったらどうするか 94

さいごに——今後の展望 95

はじめに

十冊の本が出る裏には、五十点の埋もれた企画があります。さまざまな理由で企画は頓挫し、日の目を見ずに、ほとんどの場合、その書き手のパソコンのハードディスクのなかで眠っています。わかったのは、書きあげられる人は少ないということです。内容云々もありますが、本になる分量が書けないということでもあります。どうして書いてくれないのだろうと思うていたのですが、書いてくれないわけじゃなく、書けなかったのでしょうか。

長年編集者をしていますと、さまざまな方から「今度、こんな本を出したいと思うている」といったお話を頂戴します。そんなとき、面白そうでしたら「本にしますよ」とお答えします。しかし、これも原稿がこないで終わることがとても多く、やはり、パソコンのハードディスクに眠ってしまったのでしょうか。これも、本にする分量が書けなかった、ということかもしれません。

確かに、書くということは大変な作業です。プロの書き手でしたら、書く時間は十分に取れますし、一日で原稿用紙で五十枚も、多い人ですと、百枚以上書く力を持っています。でも、それは百メートルを九秒台で走る選手のように

なもので、トップアスリートの世界です。専門家は、たとえば文才があっても、そこまでの能力はないですし、時間もありません。しかも、ふつうのトップアスリートでもない人にとって書くことは、とてもしんどく、つらい作業です。そのうえ孤独です。一日五枚書ければ十分というところで、本にするべき分量である四百枚（四百字詰めの原稿用紙換算にして。以降、「枚」とあるときは原稿用紙の換算枚数です）を書きあげるのは八〇日後。一週間に休日の一日を書くことあてるとしたら、出上がるのは二年後です。

そんな書き手と伴走をしていて、なんとなくわかってきたものがあります。この本は、そんな私の経験から、その道の専門家が、何かを本としてまとめるときのノウハウをいろいろと考えてみたものです。大きく二部に分かれています。第一部は、本をまとめるときの企画法について。もう一つの第二部は、書き方そのものについてです。第二部は各種「文章読本」など類書はたくさんあるので、基本的な部分はそちらを参考にしていただいて、あまり描かれないうことを書きました。

本書という「本」とは、専門家——その道のプロ——の人たちが書く「本」の意味です。小説や人生録などではありません。何か一つのこと打ち込み、生活の多くをそれに

費やしていると、人はたいていそれについてまとめてみたくなるものです。脳波に詳しい脳神経科医は、その脳波測定のと思想を同僚や後進に伝えたいと思うでしょう。ある料理人は自分の味をだれもが家庭で再現できるようにレシピ集を出したいと願うでしょう。人生録ではないと書きましたが、その人が人生を賭してきた「道」について語るわけですから、人生録そのものかもしれません。

私は日刊の建設業界の専門紙の記者を三年ほど勤めた後、心理学・精神医学の専門出版社で編集者として十数年をすごし、現在は同じ分野の学術書・専門書を出す出版社を興し、コツコツと本や雑誌を作っています。

記者から編集者への転職は書く側から書いたものを読む側への転進でした。他人のネクタイを締めてあげているみたいなもの、ちぐはぐというか、隔靴搔痒というか、そういう気分になりました。記者時代の上司から「自分で書かないなんてつまらないじゃないか」と言われ、確かにそうかも知ないあ、と思ったものです。

しかし、編集者として生きていると、黒子に徹するのも楽しくなってきました。専門書づくりは、その道ではプロですが、「書く」という意味では専門家ではない方々との共同作業です。初めて書いたものが活字になった、初めて

本を出した、というような方たちと一緒に仕事をしていると、たとえそれが七〇歳をすぎたご年配の方であろうと、こちらまでも初々しい気持ちになつてきます。そしてその本が世間で評価を受けると、わがことのように嬉しいものです。編集者は、そういう場面に立ち会える幸福な仕事だな、と思えるようになりました。書く読む、両方の仕事に携わったのは偶然ですが、今の仕事に生きています。

私の編集者としての最大の夢は、たとえば河合隼雄先生のような人の最初の本に立ち会うことです。その野望のため、私はどんなに若い人でも、文章が今ひとつでも、「最初の単著」を作る機会にはなるべくタツチしようとしています。本を出したことのない隠れた才人の企画を作り、素晴らしい本を制作し、売れ、いつしか名著と言われるようになる、それが最良の編集者の仕事だと私は思います。ぜひトライしてみてください。本を作るのは楽しい作業です。

なお、本書における「専門家」とは、基本的にその道のプロ（あらゆるプロ）ということになっていますが、自然、この本では私の日常の仕事から、研究者や医療者、教育者などがイメージされるかもしれません。読み替えてもらえばいいように、なるべく書き進めていくつもりです。

第1部

本をまとめる！——発想から企画化まで

第1部のはじめに

どういう本を作りたいのか、漠然としたイメージはあると思います。本一冊、だいたい二百ページと考えますと、四百字詰め原稿用紙で、四百枚くらいの分量となります（以下、「枚」とあるときは原稿用紙の換算枚数を指す）。文字数すると十六万字です。二百枚くらいから本にはなりません、それだと薄めの新書一冊になる見当になります。それを頭に入れてもらって、自分の本のイメージを分類してみしましょう。分類リストは以下の通りです。

- ①書き溜めたものがある（例えば、論文など）ので、それをまとめたい。書き溜めたものは、十分一冊になる分量がある。
- （い）それは、何本にもわたる論文なり、エッセイなり、ホームページなどの文章である。
- （ろ）それは、博士論文・修士論文である。
- ↓第1章をごらんください。
- ②書き溜めたものがあり、それをまとめたいと思うものの、一冊になる分量には心もとない。
- ↓第2章をごらんください。
- ③書いたものはないが、レジュメや講演や授業などをして、テープなどに音源がある。
- ↓第3章をごらんください。

④ほとんど原稿がない。ゼロからのスタートである。

（い）一人で書き下ろしたい。

（ろ）翻訳をしたい。

↓第4章をごらんください。

⑤教科書（的なもの）を作りたい。

↓第5章をごらんください。

⑥何人かで書きたい。いわゆる「編集もの」である。

↓第6章をごらんください。

イメージがしかとある方は、時間の都合もあるでしょうから、上で示した章にさくつと進んでください。その上で、第2部を読んでいただければよからうかと思えます。イメージが漠然としていたしかたない方、あるいは、本書を読み通してやろうというありがたくも奇特な方は、1章から順繰りに読んでください。一応、全部に目を通していただければ、全部に目を通さなかった方に比較すれば、本をまとめるという技術についての、あるいは「編集」という作業についての知見や視野が広がるものと思います。

第1章

**書き溜めたものがある（例えば、論文など）ので、それをまとめたい。
書き溜めたものは、十分一冊になる分量がある方の場合**

1 だれに読んでもらうのかを考えましょう

書き溜めたものがある方は、基本的に根がまじめというか、筆まめな方だと思えます。筆力が旺盛です。書き散らしてきたというと語弊があるかもしれませんが、職業人生のなかでさまざまに文章をなしてきたでしょう。編集者としては、一番ありがたい執筆者でもあります。

専門家でしたら、まとまった世界観で、論文なりエッセイなりを書かれてきたのではないかと思います。自ら雑誌や学会誌などに投稿してきたり、あるいはだれかに頼まれてエッセイを書いたりしたのではないかと思います。

先ほど、一冊十六万字と言いましたが、たとえば、学術論文ですと、一本八千字から一万六千字というところがよくある字数かと思われます。原稿用紙に換算すれば二十枚

から四十枚。これらの論文を集めて一冊にすることを考えると、十本から二十本ほどで一冊になる計算になります。

学術的な専門家で、それなりの業績がある方ならば、一年に一つくらい研究論文をものにされているハズです。そうなれば、十年でだいたい本一冊ができるわけです。二十代の後半から始めても、三十代の半ばをすぎれば、職業人生十年で、本が一冊できることになります。二十年、三十年と仕事をしてきた方も多かるうことです。そうすると、三十本、四十本と書いてきたものが集まるでしょう。畏れ多い例ではございますが、天皇陛下も、皇太子時代から英語論文を入れ三十本を越える論文（含、共著）をものにしてきたそうです。忙しいなんて言ってられないですね。そうそう言い忘れましたけれど、論文を書いたら、コピーを取るクセをつけておいたほうが専門家としてはいい

でしょう。論文を書くと、冊子などを作ることがありますが、有料サービスでもなるべくそれは作っておいた方がよいと思います。友人・知人に配つても、一部は手元にとっておきましょう。こういう冊子がありますと、一冊まとめるときの作業がとても楽になります。

最近の研究者ですと、駆け出しのころからワープロを使っていたり、パソコンで原稿を書いていたりますから、そういう方でしたら、データをとっておく、ということも肝心です。これもあると、冊子以上に便利です。印刷時の文章と、手元にあるデータが異なるということもあるかもしれません。手元にあるデータを直したりすることも大事です。もし、面倒でしたら、その冊子を印刷した印刷屋さんなり、出版社に、最終の印刷データ（テキストデータ）をくれるよう頼んでおくのもいいでしょう。さすがに昔のものはデータとして存在していませんが、ここ数年のものでしたら残っているかもしれません。とはいえ、印刷時のデータは特殊な形でして、ワードや一太郎といった形式ではありません。なので書式をなくした「メモ帳」ソフトで使うようなプレーンテキスト（.txt）として渡すしかできませんので、原稿時のレイアウトとは変わってしまうこともあります。ありますが、頑張つてレイアウトするか、しないまでも

（私ならしませんが）、フォルダか何かに整理しておいた方がいいでしょう。

さて、論文が集まりました。ぎりぎり四百枚だ、という方は、どうしようもありませんが、四百枚は優に超えているという方ですと、書いてきたものを取捨選択する必要があります。まずは、冊子を並べてみるもよし。ざくつと書いてきたデータを開いてみるもよし、です。

このときに重要なのが、その本を「だれに読んでもらいたいんだろう」と考えることです。要するに、本を作る作業（編集作業）の最初の一步は、読者を想定することです。これさえしっかりと押さえられれば、実は本としては百点満点で八〇点も取れたも同然です。本として売り出しても、ちゃんと売れます。もちろん、その読者対象が五十人くらいしかないという場合もあるかもしれませんが、まあ、そのときは一冊一万円にでもすれば……。

普通の小説でしたら、読んでくれるであろう読者はなかなか想像できません。「きつと、自分のような若者」くらいのイメージしかないでしょうし、それはとても抽象的なものです。ボトルに入れた手紙を海に流すような感じがします。けれど、専門書でしたら、それなりの読者イメージ

第2章

書き溜めたものがあり、それをまとめたいと思うものの、

一冊になる分量には心もとない方の場合

何度か言いましたように、四百枚あればしつかりとした厚みの本が一冊できます。最低でも二百枚くらいからできますが、正直、薄いウエハースみたいな本ができるだけです（ちなみに本書は二四〇枚ほど。ウエハースです）。読み応えがあるとは言えないですし、環境のためにもよくないです。というのも、ある程度厚み（束（ツカ）と、業界では言いますが）がないと、書店さんの棚に並んだときに、背表紙の字があまりにも小さくなってしまいます。なので、行間を大きく開けたり、文字の大きさを大きくしたり、レイアウトに工夫を凝らして一ページ辺りの文字数を少なくしたりして、全体のページを増やそうとします。それでもダメなら、紙を厚くするという手段をとります。それでも、ようやくそれなりに背が厚くなるのですが、「うわー、すつかすか!」というようなレイアウトになることは必定です。

紙がモツタイナイじゃないですか。森林資源を大切に。

なので、基本路線としては、三百枚から四百枚を目指しましょう。とはいえ、「書き溜めたものがあり、それをまとめたいと思うものの、一冊になる分量には心もとない方」といっても、人によってとても差があるでしょう。百枚分くらいの分量しかないという人もいれば、二百五十枚はあるのだが……という方もおられましょう。あるいは、こういう方もいます。自分ではまとめたいと思っている分野が二つあり、どちらでもよい論文などを書いてきたのだが、それぞれを本にするには量が足りない、といって、その二つをまとめるとおかしなことになってしまおうし……。

論文は、学問分野によってずいぶんと違いますが、だいたい一本二〇枚から五〇枚くらいが標準です。それなりに専門職として業績を積んでおられ、「そろそろ本でも」と思

う方ならば、まあ、五、六本の論文はあるはずです。なので、ここでは、百枚しか原稿がないが、それを四百枚にしたい、という場合を考えてみます。

1 タイトルをつける

本を書きたいと思っっている割には、自分でも何を書いた方がいいのかよくわからない方は多いです。正確に言うと、何から手をつければいいのかわからず途方に暮れているといった感じです。

机の前に、では、5つの論文を並べてください。1章にも書きましたが、時代順に並べてみるか、あるいは難易度順に並べてみるのがいいです。もしくは、重箱の隅つつき度順というのか、総論が各論かによって並べてみます。五つですから、さほど時間はかからないでしょう。

では、ファースト・ステップとして、「タイトル」をつけてみましょう。

この五つの論文をうねうねと見つっ、まとまるべきタイトルを決めます。タイトルは、五つの論文が串刺しになるようなタイプのものがベストです。とはいえ、完璧を求めずにだいたいのところでつけてください。また、なるべく具体的なものがいいでしょう。

たとえば、

「児童精神科臨床における催眠療法の技法について」

「催眠の歴史におけるエリクソンの役割」

「催眠療法を学校臨床において使用すること」

「強迫神経症の患者に対する催眠療法」

「自己暗示とリラクセーション」

という五論文でしたら、串刺しにすべきキーワードは「催眠」です。タイトルとしては、『催眠療法の臨床応用』といった感じになるでしょう。

では、もう一例。

「児童精神科臨床における催眠療法の技法について」

「子どもと家族の精神科臨床を考える」

「学校臨床と教員へのコンサルテーション」

「強迫神経症の十二歳男児への精神療法アプローチ」

「自己暗示とリラクセーション」

これは悩むところですが、どうも「子ども」が多い。ということは、「子ども臨床」とか「児童精神科」というのをキーワードにしたいところです。『子どものための精神医学と精神療法』なんてどうでしょうかね。

第3章

書いたものはないが、レジュメや

講演や授業などをしてテープなどに音源がある場合

ちょっとしたワークシoppや発表でも、今や「パワーポイント」は必需品です。鮮やかなグラフや図など作りまくる方もおられますし、単に、箇条書きにまとめるような方もおられます。どちらにせよ、聴講者にとってはわかりやすくありがたいものです。

パワーポイントの存在は、専門書に影響を与えているように思います。これは実感としてあるだけで、エビデンスはないのですが、パワーポイントによくある「箇条書き」は癖になるようで、ここ十年ほどで専門書中に箇条書きというものが増えているんじゃないかと思います。あるいは「見出し」という存在も、とても上手に使われるようになってきました。少なくとも、二〇年前、三〇年前の書籍には、いまほど多くの箇条書きは使われていないですし、見出しも案外に少なく、あっても「大見出し」がある程度で、細

かく見出しが分かれているものは稀のような気がします。時代や学問の背景は、もちろんそれ以上に大きく変わっていますけれども。

ともあれ、「パワーポイント」で作った発表原稿をもとに、論文化したり、書籍化したりすることが増えているのではないかと思うのです。また、アンチ・パワー派の方でも、レジュメくらいは作ることでしょう。これから本を書きたい、という人でしたら、こうしたパワーポイントのドキュメントやレジュメを使わない手はありません。これらの内容は、即、本のテキストになるわけではないですが、重要な骨格になります。そうした発表なり講演をするときには自分の講演内容をレコーダーにとつたりすることも多いでしょう。パワーポイントという骨格があり、講演録という筋肉があるならば、すぐに本になるような気になるも

のです。実際、講演録から作られた本はとても多いですし。

1 一時間話すと何文字になるか

さて、講演というときだいたい一時間が長くても二時間くらいじゃないかと思えます。もちろん、講習会などで一日中話し続けるようなこともあるかもしれませんが、半分はワークシヨップ方式にして、実演をしたりすることが多いのではないのでしょうか。

ともあれ、問題は一時間話すと何文字になるか、ということです。NHKのアナウンサーは一分につき約四百字分の原稿を読んでいると聞いたことがあります。昔は三百字分だったとか。講演に比べ、NHKアナウンサーはゆったりと話している感じがしますが、原稿用紙にして一分につき一枚分も話している計算になります。一時間の朗読ですと、六〇枚分になります。六時間話すと、ようやく本一冊分になります。

ところが、当然、こんなにうまく問屋は卸しません。私は何冊か講演原稿を本にしたことがありますし、座談会などを雑誌に掲載したこともあるのですが、一時間話しても、使えるのはいいところ三十枚といったところです。座談会ですと、最初は真面目に語っていてもそのうちだれてきて

参加者同士が「会話」に入ることがあります。そうなるとうんでもいい情報が増えていき、編集は困ったことになるのですが、講演でも（たとえば、講演の名手と言われる方のものでも）、やはり三十枚/時間程度の分量にしかありません。そして、二時間で六十枚の原稿ですと、かなり間延びした感じになります。話はあっちこっちに行つてしまい、正直、聞いている分には面白くとも、読むと今一つです。編集者が余計な部分をカットすれば、読みやすくなりますが、その人らしさがなくなつたりします。

話し言葉は、意味としては無駄が多く、文法的にも間違いがかなりあります。テープ起こしをするとよくわかるのですが、講演においては主語と述語の不一致などふつうに行われています。対談や座談などでは、より無茶苦茶になります。けれども、話し言葉は言外に伝わるものも多く、それが人を魅了します。落語家や、たとえば、河合隼雄先生のような方の講演の名手ですと、読む側にその人の言葉の趣をイメージさせリズムなどがとても特徴的に現れて、文法がどうだろうと面白いものになる。

けれど反面無駄が多い。河合先生などは時に関西弁を交えて、「そら、あきまへん」などと茶々を入れたり、駄洒落をいったりするわけですが、学術的な講演でもそういうこ

第4章

ほとんど原稿がない。ゼロからのスタートであるひとの場合

本章では、一人で書き下ろす場合と、翻訳をする場合の方法についていろいろと考えていきたいと思います。一人で書き下ろす場合というのは、発想法なども含みますのでけっこう長いものになっています。なので、書くのが簡単な翻訳について、まずは述べてみたいと思います。

1 翻訳をやりたい

翻訳はこつこつとした地道な作業です。好きで本を訳してみるのがよし、出版社に掛け合って翻訳権を取り翻訳するのでもいいでしょう。ただ一般的に言えば、単なる趣味でこつこつとやれる本は限られています。面白い本であること。そして、難しい箇所が少なく、短い本であることです。もちろん、難解なものこそ克服しがいがあるという志の高い方は困難であろうと長大であろうとチャレンジしていた

だければいいのですが、たいいていの人はさほど時間が有り余っているわけではありませんし、飽きもあります。困難すぎたり長大すぎたりすると訳し終える前に飽きてしまうものです。英語は英語で意味がわかれば、わざわざ日本語にする必要ありません。翻訳しようというくらいですから一定レベル以上の英語力があるはずです。

なのに、わざわざ日本語にする、というところが翻訳の面白さです。しかし、作業としては一冊をまるまる書き写すことに似ています。書き写すだけだって一番短い仏典の般若心経でさえ大変なんですから、本にしたらなおのことです。

そしてただ対照となる日本語にしていくなという機械作業ではありません。英語の能力以上に日本語の能力も問われます。英語にも悪文がありますから、それを訳すというし

ても日本語でも悪文っぽくなってしまおう。とはいえ、あまりに文章の構造を変えたりすると、それはそれで原著者の気持ちに反することにもなります。

ロシア語通訳の故米原万里さんの最初のエッセイ集のタイトルは『不実な美女か貞淑な醜女か』（文春文庫）というもので、これは、原語に忠実に訳した汚い日本語がいいのか、あるいは日本語としてはとても美しいけれど意味としては原語には忠実ではないのがいいのか、という意味のメタファーなんです——まあ、この本は抱腹絶倒なうえ現代人の教養というべき一冊でありぜひ読んで欲しい本ですが、それはそれとして——まさしく翻訳の問題点はそれにつきまします。とはいえ、読者としては読みやすいほうがいいようで、今までの経験ですと、「不実な美女」の本のほうが専門書であっても売れる感じがします。「読みやすいよ」と、口コミで広がるからじゃないかと思いますが。そういう意味でも、やはり英語力以上に日本語力が問われるのです。

2 一人こつこつ訳するときの注意

①本の選び方

これは先にもいいましたが、同じ著者のものなら、短い、

薄い、易しい、で選んだ方が無難です。最近ですとアマゾンなどで洋書を購入する場合が増えていますが、そのときに本のデータとしてサイズやページ数がたいてい出ていますので、それを目安にするのがいいかと思います。タイトルをみて易しそうなものを取る。これも当然です。

日本だとあまりありませんが、英米圏の文献ですと無闇に薄い（八〇ページだとか）の本があつたりします。日本と言うと新書みたいな位置づけなんです——が、かなり専門的な分野のものも多く、意外にオススメです。

②翻訳権をとってもらう

翻訳権とは、日本でその本を翻訳出版してよいという権利のことです。実際にはだれでも取れます。だれでも、というのとは、たとえば、日本ではまったく無名の——大学院生だとか——研究者であっても、取ろうと思えば取れてしまうということです。

ただ基本的には、その原書を出した出版社やあるいはエージェント（著者の代理人）が翻訳権を管理していることが多く、翻訳権料として数十万円（もちろん、それ以上になることもあり）を要求してきますので、それを払う必要があります。また契約するまで契約書のやりとりなど大

第5章

教科書（的なもの）を作りたい

この章では、教科書、マニュアルなどを作るときのポイントについて考えてみます。とはいえ、小・中学生向けの教科書については門外漢ですし、高校生辺りに向けた教科書についてもよくわかりません。ときどき高校生あたりに向けて、専門家が専門的な内容について記した本なんていうものが出ていたりしますが、私としては（自分がぼんくらな高校生だったこともあり）、そんなもの、必要かね、という感じもしないでもありません。頭のいい子は大学生くらいが読みそうな本をすでに読んでいたりしますし、頭がよくない子は本なんか読みません。私の小学生のときに同じクラスだった吉田君はとても頭がよく、私にパソコンのプログラム言語（BASIC）を手とり足とり教えてくれましたが、彼の愛読書は『ルービックキューブ解法』とかいう数学的にかの有名なパズルを解く方法論でした。読ま

せてもらいましたがチンプンカンプンでした。そういう子は中学生くらいで『相対性理論』とか読んじやうんでしょうね。小学校のときに引越してしまったので、どう生きているのかわからないですが、風の噂では旧帝大の工学部に入ったとか。さて、私のどうでもいい思い出話と前おきは置いておきます。ここでは大学生以上の教科書について考えていきます。

1 教科書は大学教員のお小遣いになりうるか

大学生のころ、「あの先生も自分の本を教科書指定にしてセコいよなあ」なんていうことを言ったものです。そのセコい商売の片棒を担いでいる今、まあ、確かに、と肯いてしまふところもあります。とはいえ、まあ、ちよつと計算してみましよう。

教科書の平均定価は年々下がり気味らしいですが、たとえば、二千円だと仮定しましょう。不思議と、教科書として作った本は教科書としてのみしか売れず、ほとんどそれ以外に流通することはありません。これは私の経験上そうなので、他の出版社では違うのかも知れませんが、なんともタイトルから何から匂うらしいですね、教科書っぽいところが。なので、一般にはあまり売れないが、教科書として数力所で採用されるということを見込み、刷り部数を決定します。二千円という本としてはやや高めの設定ですと、頁数などにもよりますが、そうですね、二千部くらいですかね、刷り部数は。

たいていの印税は一〇パーセントが標準です。ない場合もありますし、現物支給ということもあります。翻訳などでは四く六パーセントです。ま、通常の印税（一〇パーセント）で、二千円、二千部初刷ですと四十万円の印税が入ってくる計算になります。これに源泉徴収（一割）がされるので、振込みは三十六万円。

けっこういい額や、と思われると思いますが、さすがに小遣い程度ですよ。しかも、原稿用紙四百枚は書いていますから。原稿用紙四百枚書くのにどのくらいの時間が必要かという、筆の早い人で一日二時間で五枚程度という

ところでしょう。作家の林真理子さんは一、二時間で二十枚くらいは軽く書くそうですが（週刊誌の対談で言っていました）、それはプロ中のプロの話で、普通の人ですと五枚もいかないでしょう。しかも、毎日毎日二時間割けるわけではないですし、書くためには資料も集める必要があるし、本も読む必要もあるし、というので、少なくともんだかんだで四百枚書くのには四百時間は必要なのではないかと思います。時給にして九百円です。書く時間でこうです。書籍として出版社で出すのなら、編集部から書き直しを迫られるかもしれないし、校正作業などもあります。これで毎年二千部がはければいいですが、大教室の授業も減っている昨今、年七百部、二千部が三年ではければ御の字という程度です（遠見書房では二く三百部出るのならばありがたく商売させていただきます、ハイ）。一年の印税は売り上げ印税だとして、三十六万円の三分の一という計算になります。これで、ゼミ生などと「和民」などに飲みに行き、「よし、ここは先生がおごつてやろう」などといい気持ちになれば赤字転落必至です。となると、明らかにコンビニで働くほうが割がいいというような話になります。もちろん、本を書くことは業績になりますし、それによって講演に招かれるという副次的な要素もあります。ものす

第6章

何人かで書きたい。いわゆる「編集もの」である

編集ものというのは、本の表紙に「○○編」だとか、「○○編著」と記された本のことです。専門書の一定割合は、こうした編集ものに占められています。では、なぜ、編集ものとなるのでしょうか。

1 スピードが速い

似たようなタイトルであり、内容、値段ともに同様、どちらもよく知っている著者……といった本があるときに、多くの人は「奥付」をみて、「何年に出版したものか」を調べようとします。「古いものこそオリジナリティがある。私は古いものを買う」といった人はあまりいないでしょう。多くは新しい方の本を買うはず。新しいものには新しさが詰まっていると期待するからです。

出版物は「スピード」が求められるようになりました。

とくに「先陣争い」が重要な科学の分野ではそうでしょう。最近の「新発見」論文の多くは、『サイエンス』誌などの電子版に掲載されたりすることが多いような気がします。紙媒体ですらないのかもしれませんが。

しかし、論文ならいざ知らず、一人の著者がスピードを求めて本を書くことは難しいことです。本一冊を書くことはかなりの日数を必要とします。しかし、数カ月後に本を出しておきたいということはよくあることです。

そこで編集ものです。

編集ものは一冊を何人かで分けて書きます。たとえば、四百枚の原稿を作らなくてはならないときに、十人でやれば一人頭四〇枚となります。作業量は単純に十分の一になるわけではないですが、それでも四百枚書くよりはずっと短い時間で済むでしょう。その分、本が出るまでの時間が

短縮化されます。

2 質・量が向上する

一人では書けないことがあります。一人の経験も限られています。たとえば、登山の本を作るときに、エベレスト登山のことを書きたくても、登頂したことがなければ上手に書けないかもしれません。でしたら、だれか登ったことのある人に書いてもらえばいい。

これによって、あるテーマに関することを深めること、広げることができます。

一人で書くことは、限界があります。そもそも書くことは、何かを「書かない」選択をしているわけです。つまり、書き手は制約しながら書いていることになります。

そこで編集ものです。いい著者、いいものを集めれば、本の質は飛躍的に向上するでしょう。量も増え、質と量の相乗効果が期待できます。

また、一人ではできないことを何人かでやるわけですから、どうしても長くなるところがあります。もちろん、人数を限ればいいのですが、あまり参加者を減らしても量が減るだけです。で複数で書く意味はあまりありません。量を増やすメリットはあって、本が分厚くなるということでは

す。製作コストが高くなり、それが価格に反映されるわけ、当然高くなるのですから、あまりメリットにはならないのではないかと思われるかもしれませんが、専門書に限って言えば、本が分厚く、値段が高くなっても、売れ行きはさほど変わりません。専門職の方が必要とするからですし、趣味の本と違い、図書費として経費購入も可能ですから、一定量は売れる面があるでしょう。出版社としても一冊本を流通に流すという作業は、薄かろうと厚かろうとあまり変わりませんから、ありがたい面もあります。

3 仲間づくり

仲間づくりのために編集ものが存在していることがあります。仲間をつくるというよりも、もともと知り合いくらいの間柄だったのをより仲間意識を高めようとはかりに本を作り、意気投合して仲間になる、というような感じですよ。

近年、持ち込みで多いのは、勉強会のメンバーやメーリングリストなどのメンバーなどによって組織だてられたチームによる編集ものです。ちょっと前までは「〇〇先生を囲む弟子たち」というようなメンバーの本も多かったのですが、最近は減ったような気がします。

縦から横へ、研究者や実践家の連携の仕方も変わってきて

第2部

文章のテクニック

第2部のはじめに

世に文章執筆のノウハウを扱ったいわゆる「文章読本」的な本は数々あります。谷崎から始まり、三島も書いていますし、中村真一郎や川端康成も書いていますし、丸谷才一に井上ひさしも書いています。執筆のノウハウを歴史的に紐解くとすれば、藤原定家の歌論くらいから本来なら始めるべきなのでしょうが教養がないのでできません。文学者だけでなく、ジャーナリストの本多勝一には『日本語の作文技術』（朝日文庫）という名著がありますし、小論文作法というような本もたくさん出ています。物理学者木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書）は著名すぎる一冊でしょう。また、それらを書評した斎藤美奈子『文章読本さん江』（ちくま文庫）という本もあります。

個人的にオススメは井上ひさし『自家製文章読本』（文春文庫）でしょうか。斎藤美奈子の本もなかなか面白いのですが、「文章を書くということ」を側面から見ている本なので「文章が下手で困っている」人にはあまりうってつけではないでしょう。その点、井上ひさしは一冊の本を作るために本棚を一つ買うというくらい文献マニアだけあって、多くの文章読本的著作からアイデアをいただいております。

とても豊かなものになっています。

かように文章を上手に書くという趣旨の本はたくさんあります。なので、文章がうまくなりたいたいという人は、その手の本を読んでもらうことがまずいいのではないかと思います。本書でも恥知らず恐れ知らずにも一応、書きますが、文章読本関連本はゴマンとあり、つまりは、定型的な方法なんてあまりない、ということです。人生と一緒にです。

なので、第2部ではいかに書き進め、書き終えるかという問題をちよつと考えてみます。案外、これは重要なテクニクではないかと思えます。

第7章

文章が下手とは何か

1 うまくなる秘訣

文章をうまく書けるようになる秘訣は、二点に集約されます。

第一に、いい本を読むこと。専門家の文章が面白くも文学的でもないのは文章の専門家ではないからです。近年では大教養人は滅びつつあるのでなおさらなのですが（とはいえ、三十年前の専門家の文章は平均的にはもつとひどかったと感じます）、専門家はあまり専門外の本を読まない。文芸書なんてあまり読まれないですね。ある開業医紹介のフリーペーパーにその開業医の「愛読書」が載っていました。が、けっこう「自己啓発本」みたいなのが多くて失笑してしまいました。ま、そんなことはどうでもいいのですが、いい本を読むこと。文章がうまくなる秘訣はまずはこれです。

第二に、文章をまめに書くこと。文章もあらゆる作業と一緒にトレーニング次第でうまくなります。Eメールでもいいですし、手紙でもいいです。でも特定の人物よりも不特定多数に向けた文章の方が練習になります。他人様のブログなどを見ていると、仲間うちだけでわかるような言葉で書いているブログは内容そのものが貧弱です。流行語を多用していてもだれか他の人たちに向かって書いている意識のあるものは、流行語の意味がオジサンにはわからなくても、けっこう読ませたりします。そして毎日書くことです。論文を書くのでも、ブログを書くのでも、日記でも小説でもなんでもOKですが、とにかく毎日文章を意識して書くことです。実際、あまりに書かないでいると、文章作法というものは忘れてしまうことがあります。

文章がうまくなるためには、この二つをやることでしょ

第8章

本を書き終えるために

1 動機づけ

「はじめに」にも述べましたが、お蔵入りの企画というのは数多くあります。ご自身で本の企画を持ち込んだものにもかかわらず、そして出版社として出版OKしたのものにもかかわらず、お蔵入りになる。なぜそうなるかと言えば、結局のところ本人の動機づけの問題ではないかと思っています。

専門家である以上、自著の一冊や二冊あつてもいいのではないかと思うのですが、現実にはなかなか本を書くような機会には恵まれません。それでも「よし、書いてみよう」と思うものの、日常の忙しさに流されているうちに十年、二十年とたつてしまう……というようなこともあります。

本を書く動機はさまざまにあるでしょう。単に本というものを出版してみたいという方もあれば、教科書の執筆など

を依頼されようがなくなってしまう方もおられるかもしれません。けっこう多いのは、個人史的な面で本を書きたいと思うことです。たとえば、結婚二十年を記念してだとか、開業して十年になるのでその記念にだとか、自分の肉親が死んだので喪の仕事に関する本を書きたいとか。臨床において特別な患者さんが死んでしまったので本を書くことで患者さんの存在を残したいというような動機もあります。

動機づけは三つに分けられそうです。

一つには、ビジネス上の動機づけ。一番多い動機はこれではないかと思います。依頼があつたり、仕事仲間で本作りが決まったりだとか。アカデミックポストを得るために業績を作るための本というものもあります。二つには、明るい動機づけ。「記念に」という類のものです。退官記念本や創業何周年記念、還暦祝い本などなど。特に本のなかに

それが触れられてはいなくても、案外とこの手の本は多い気がします。三つ目には、暗い、動機づけ。先の喪の仕事の本などはよくあるケースです。死に関する体験は、多くの人に何かを書かせる動機づけになるのではないかと思えます。他にも、ある男にバカにされたのでそれで見返してやろうと、本の企画をされるような方もいます。ルサンチマン本とでも名づけたいものです。

しかし、これらのモチベーションを持ち続けるのはとても難しいものです。ビジネス上の動機づけは、それで得られる利益が大きいところもあるので、動機づけが一番高いでしょう。明るい動機づけは、楽しく、愉快な本が多いのですが、他人を巻き込まない企画でしたら、事実上締め切りが存在しなくなるので延々と執筆状態が続くこともあります。暗い動機づけの本は、ルサンチマンだけに、パワーがありまして短期間で集中して原稿を作ることにものなるのですが、やはりそのうち、怒りというものがどうしてもよくなることもあります。ネガティブなものですから、目をそむけたくなるかもしれません。ちよつとたつてから読み返したりすると、あまりものドロドロとした感情の発露に、自分でさえ辟易としてしまうようなことがあるのか。しかし芸術作品の多くは、このネガティブな世界から生まれて

いるものばかりという感じがします。なので作家は壊れていつてしまうこともあるのでしょうか。

動機づけを高めるためには、これらを組み合わせるのが一番です。本を作る動機をいろいろと考えてみるわけですがたとえば、この本、私が書いているこの本の場合、「自分の会社に企画の持ち込みが増えないかなあ」という企みが裏にあります（公開しますが）。それと、本書に書いてきたようなことを、多くの筆者になった方々との間でメールなどやりとりをしてきており、いつかまとめたいなあ、と思っていました。「書けない」という方本場に多いんです。同じことを書くのも面倒じゃないですか……。そして、ある先生が遠見書房の創業記念パーティーを開いてくれるという話になっていたこともあり、パーティーの話は延期になったのですが、その引き出物として、小冊子を作ろうと書き出したのが発端でもあります。

かように、動機づけとなる事柄は多いほどいいと思います。

2 セルフ・マネジメントをする

「いまからやろうと思っている」とか、「明日から本を出す」と思っている、書き上げるのはとても難しい。書き

さいごに——今後の展望

原稿ができた。

嬉しいことです。よかったですね。本当にそう思います。私もこの原稿で「さいごに」まで行きついたので、嘘偽りなく、「よかった」と書き終えた皆さんと祝杯をあげたい気分です。

さて、その原稿をどうするかが今後の展望になるでしょう。当然、本にしたいと思われているはずです。

出版社は、多くの出版社において、持ち込みを歓迎しています。特に、あなたは専門家なわけですから、その専門家がよく本を出しているような専門書出版社にとっては、持ち込みは熱烈歓迎でしょう。

持ち込みの仕方は簡単です。まず企画書を書きます。「こういう本です」と簡単にまとめたものです。原稿があるのでしたらさほど詳しいものでなくとも十分でしょう。手紙のようなものでもかまいません。それと目次やイントロダクションをつけて送ります。「〇〇社編集部編集長」に向けて郵便で出せばＯＫです。

電子メールでもいいでしょう。大代表に送ってしまってもいいのではないかと思います。ただ、電子メールの場合、

最初は「こういう企画があるのだが、担当者に連絡をしてほしい」といったメールで打診をしてからのほうが無難というか、ビジネスライクかもしれません。

返事がくるでしょう。一、二カ月かかることもあるかもしれませんが、それ以上ですと、「無視された」ということかと思えますので、クヨクヨせずに次に行きましょう。とはいえ、多くの場合、返事は必ずくると思います。

その結論が出るまでの間、出版社においては非常にシビアな計算がされています。

この本は売れるのか？

うちの会社で売れるのか？

いくらなら売れるのか？

余計に売れるとしたらどうしたらいいのか？

そんなことを会議しています。売れる見込みがたちそうでしたら、ＧＯサインが出ます。ちよつと厳しそうですね。「これ、教科書などで使われたりしますか？」などと聞くこともあります。採用が年に何百部ある、というのですと、かなり前向きな回答が寄せられることでしょう。

「こんな原稿なあ、自費出版してくれればいいのに」というような原稿である場合も少なくありません。「買取しても

「ええ、そうですか?」と聞くこともあります。

他の出版社はどうなのか? 著者としては、そう考えてしまうことでしょう。基本的なルールとして、まず一社に連絡し回答を得た後で、他の会社に移す、ということになっていきます。とはいえ、最初の社が特に何の条件もなくOKを出しているのに、他所の社に持っていくのはこれは信義に反します。本を何冊か出したのでしたら、あまりメリットはないので、やめたほうがいいでしょう。出版社同士の付き合いはけっこうありますので、悪い噂がたつだけです。ただ、印税があるのか、刷り部数はどのくらいか、本の単価はいくらくらいか、などその辺りは確認のためにも聞いておいたほうがいいでしょう。

次に自費出版の場合です。これは1章8にも書きましたので参照してください。自費出版の大々的な広告をしているところがあります。聞くと、数百万円の値段を請求するとか。これははっきり言って暴利です。自費出版をされる方は、複数の出版社に見積もりをとることをオススメします。またインターネットなどで情報を収集することもしてみてください。

本という形は便利なのでまだまだ残るでしょう。しかし、

インターネットにある情報との差別化のために、本の用途はどんどんと専門化していくかと思います。百万人の読者に向けた本と、千人の読者に向けた本と、その両極に分かれていくことでしょう。

私は遠見書房という会社を興すにあたって、ネットや本、雑誌などからさまざまな情報を得ましたが、一番役に立ったのはまだまだ本でした。夢想の段階でしたら、ネットや雑誌の情報で十分刺激的なのですが、より具体的な段階ですと、やはり本の情報がまとまっていて便利でした。妙に本の可能性やありがたさを感じた瞬間でした。本はまだまだ力を持っています。

さて、いろいろと書いてきてしまいましたが、ほかにもいろいろと書きたいことがありました。私の発見したキーワード羅列の多少における性差論とか、わが身を振り返らずに「余計なことを書く人が多い」などと喝を入れようかとも(4章4③に若干書きましたが)。とはいえ、まあ、この辺りでやめておきます。

本を書きたいなあという人、ぜひ、本書を共に書き進めていただければと思います。

遠見書房代表 山内俊介

遠見書房とは、心と社会の学術書・専門図書を中心に出版活動をしようと、2008 年末に創立された出版社です。臨床心理学や精神医学、福祉学を中心とした実践家に役立つ本と、その周縁にある「人間って何だろう？」という問いを命題に孕んでいる学際領域の本——この二つのスペクトラムのなかで、生きた知識が詰まった本をお届けできればと願っております。

小社でも随時、本の持ち込み企画を募集しています。もちろん、できること、できないこと、いろいろとあるかと思いますが、漠然としたアイデアの段階でも、ご相談いただければと思います。どうぞ、お気軽にお問い合わせください。

なお、文中で、精神障害者の自立支援型作業所であるクラブハウス町田を紹介しました。遠見書房では執筆や編集にかかわる仕事の一部をクラブハウス町田に委託しており、皆様からの依頼があれば紹介する窓口もしています。クラブハウス町田ではテープ起こしや活字や手書き文字のデジタル化などを請け負っています。詳しくは遠見書房のホームページ(<http://tomishobo.com/volunteer.html>)をごらんください。

専門家のための「本を書こう！」入門

2009 年 6 月 1 日 PDF 版発行

著者・発行人 山内俊介 (やまのうち・しゅんすけ)

発 行 所 遠見書房

〒 183-0006 東京都府中市緑町 3-5-1-305

Tel 042-306-7763 Fax 050-3488-3894

tomi@tomishobo.com <http://tomishobo.com>

郵便振替 00120-4-585728

印刷 太平印刷社・製本 井上製本所

ISBN978-4-904536-03-2 C0000

©Tomishobo 2009

Printed in Japan

